

単文のパズルについて

藤川直也 (Naoya Fujikawa)

首都大学東京人文科学研究科 (日本学術振興会特別研究員)

ソールは、命題的態度、様相、引用に関する表現を含まない文を単文と呼び、単文において同一指示固有名の代入が直感的に真理値を保存しないような事例を指摘した (Saul, 1997, 2007)。たとえば、われわれは「スーパーマン」と「クラーク・ケント」が同一の人物を指示することを知っているが、しかし、

(1a) クラーク・ケントが電話ボックスに入っていく、スーパーマンが出てきた。

(1b) クラーク・ケントが電話ボックスに入っていく、クラーク・ケントが出てきた。

という文がしばしば異なる真理値をもつと考える。この種の問題は単文のパズルと呼ばれる。

単文のパズルに対してムーアは次のような解決策を提示した (Moore, 1999, 2000)。

「スーパーマン」と「クラーク・ケント」は、その通常の指示対象である同一個体を意味論的内容にもつ場合と、その同一個体の異なるアスペクトをそれぞれ指示し、意味論的内容とする場合がある。後者のように指示が「シフト」した場合、「スーパーマン」と「クラーク・ケント」は同一指示固有名ではなく、それゆえ、上述の文のペアは、同一指示固有名の代入の事例ではそもそもない。さらにこの場合、上述の文のペアは、それぞれ異なる命題を意味論的内容としてもつので、それらの真理値に違いが生じるということには、何の問題もない。

ムーアによれば、「スーパーマン」や「クラーク・ケント」のような通常の用法では同一の個体を指示する固有名が、当の個体の異なるアスペクトへと指示をシフトし、それらのアスペクトを意味論的内容として命題に提供するためには、次のような条件が少なくとも満たされていなければならない。まず、当の文が用いられた会話の参加者が、スーパーマンとクラーク・ケントの同一性を知っている。さらに話し手は、当の名前を用いる際に、その通常の指示対象である個体についてではなく、その個体のあるアスペクトについて語ろうと意図している。

これに対してソールは、発話が表現する内容は、ムーアが主張するような仕方で、会話の参加者の知識状態や意図に依存してはいない、ということを次のような事例を挙げて、主張している (Saul, 2007)。

クリントンは嘘つきではないのか？：

クリントン元大統領は、ホワイトハウス実習生として昼間仕事をしているときのモニカ・ルインスキーとは性的な関係をもったことがないとする。このとき、ムーアの理論に従えば、クリントンが、ホワイトハウス実習生としてのアスペクトを指示する意図で発話した、

(2) 「私はルインスキーさんと性的な関係にはなかった」

は、ルインスキーのまじめなホワイトハウス実習生としてのアスペクトに関する命題を表現し、そしてこれはホワイトハウスのなかで生じていた出来事に照らして真である。つまりクリントンは嘘をついていなかったことになる。しかしこれは受け入れがたい。

同一性に関する知識は必要か？：

ムーアの理論によれば、(1a)が異なる二つのアスペクトを含む命題（それゆえ(1b)とは異なる命題）を表現するには、それらが発話された会話の参加者が、スーパーマンとクラーク・ケントの同一性を知っていなければならない。すると、この同一性をまだ知らないときのロイス・レーンが発話した(1a)はアスペクトを含む命題を表現できず、それゆえ(1b)と同じ真理値をもつことになるが、これはもっともらしくない。

以上を踏まえた上で、本発表では次のことを論じる。

(i)：ムーアが主張する指示のシフトは、一種の前命題的語用論プロセスによって説明でき、さらにこの説明枠組みのなかで、ムーアの理論からはクリントン元大統領が嘘をついていなかったということが帰結するというソールの反論をかわすことができる。（ただしこの場合、アスペクトを含む命題が、(1a)の類いの文の発話によって直接主張されていることだと言うことはできるが、それがその文の意味論的内容だと言うことはできないだろう。）

(ii)：これに対して、スーパーマンとクラーク・ケントの同一性を知らなかったロイス・レーンが(1a)の発話によってアスペクト命題を表現しているということは、(i)で擁護する類いの指示のシフトによって説明されない。むしろそれは、固有名の通常の用法が、個体ではなく個体のアスペクトを指示する場合があるということによって説明される。

文献

- Moore, J. (1999). 'Saving Substitutivity in Simple Sentences', *Analysis*, 59, 91-105.
———(2000). 'Did Clinton Lie?', *Analysis*, 60, 250-254.
Saul, J. (1997), 'Substitution and Simple Sentences', *Analysis*, 57, 102-108.
———(2007), *Simple Sentences, Substitution, and Intuitions*, Oxford: Oxford University Press.